

「エクリチュールの変容」と「知の変容」に関する研究

—電子的エクリチュールによる主体の変容をめぐって—

Transformation of ecriture and Transformation of knowledge
—On the transformation of the subject by electronic ecriture—

炭谷 晃男¹, 前納 弘武²
Sumitani Akio¹, Hiromu Maeno²

¹大妻女子大学社会情報学部教授,
²大妻女子大学名誉教授, 人間生活文化研究所特別研究員

キーワード：エクリチュールの変容, 知の変容, 主体の変容

Key words : Transformation of ecriture, Transformation of knowledge, Transformation of the subject

1. 研究目的

人間の言語行為の二本柱, パロールとエクリチュールのうち, 文字の出現と共に可能になったエクリチュールは, 「肉筆によるエクリチュール」に始まり, 「木版によるエクリチュール」, 「活字によるエクリチュール」と進化し, 今や「電子的エクリチュール」に移行してきた。このエクリチュールの形態的な変容は, 人間の知覚や認識のあり方, 「知のあり方」に対して様々な影響を与えてきた。本研究は, 現代の「エクリチュールの変容」に伴う人々の「知の変容」を主題とするが, その切り口の一つとして, 本稿ではマーク・ポスター著『情報様式論』に展開された議論を手がかりに進めていく。

2. 活字的エクリチュールから電子的エクリチュールへ

活字的エクリチュールと近代の社会や文化との関連についての代表的な論考の一つにハバーマス著『公共性の構造転換』がある。ハバーマスは, 「印刷物が幅をきかせていた文化では, 公共の場でなされる討議は, 事実はどうであれそれについての論者の考えがどうであるかが首尾一貫して秩序正しく配列されるという特徴を備えるようになる」と述べ, 印刷された書物の文化のもとでは, 論者の考えはどうかという点に関し, 論理的な首尾一貫性を示すようになると指摘している。

書物の文化は, 論理的合理的な言説の世界を構築し, それが近代の民主主義的思考の母胎ともなり自律的な個人を輩出してきたのであった。とこ

ろが, 近年の活字的エクリチュールの衰退は, 公共的コミュニケーションの活性化による「公共圏」の形成を衰弱せしめ, 「読書する公衆」はその影を薄めて, 論理的合理的な言説の世界それ自体も崩壊しつつある。その背後に, 電子的エクリチュールの勃興が存することはいうまでもない。この電子メディアが及ぼす影響に関する論考も数多いが, ここに取り上げるのは M. ポスターの情報様式論である。

ポスターの“The Mode of Information”は 1990 年に刊行され, 翌 1991 年には早くも『情報様式論』と題して邦訳が出版されている。その 10 年後, 岩波現代新書の一冊に入れられたが, 新書の解説を執筆した大澤真幸は, ポスターの本書がその後の研究をリードしてきたと指摘している。その一因について我々は, ポスターの分析視座が宿している普遍性, その普遍性を超えるパースペクティブをその後の研究が提出し得ていないという事実, ここに, ポスターの情報様式論がその後 30 年に渡って影響を与えてきた遠因があると考えられる。

3. 行為論から言語論へ

約 30 年前のポスターの分析視座とはどのような内容であったか。その要点を示せば, コンピュータを軸とする各種の電子的装置の社会的浸透は, 基本的に, 電子化による「新しい言語経験」を迫るものであり, これまでの普通の話し言葉や書き言葉とどのように異なっているのか, この違いの意味とは何か, という基本的問題に立ち返ることを

提唱している。

つまり、ポスターは、それぞれの時代に特有の言語状況が人間の経験にあたえる影響を中心的課題に設定して、電子メディアの本質に迫ろうとしているのである。従来、社会の変化を考察するに際しては、社会的行為論が中心的視座に置かれてきた。しかし、電子的エクリチュールがもたらす影響については、行為論に代わって言語論に求めるべきというのがポスターの視座であった。

そこで、ポスターは言語の役割に関して、2つの力に言及する。一つは、意図的な行為の道具としての言語の側面、もう一つは、「語りかけられている主体とともに語っている主体を構成する形成的な、構造化するパワー」という側面である。この2つの力は、いつの時代も同じように作用するのではない。この問題を通時的に明らかにするため、ポスターは「情報様式」という概念を設定する。すなわち、「すべての時代は、意味作用の内的外的な構造、手段、関係を含んだシンボル交換の形態を行使している」。つまり、いつの時代にもシンボル交換の形態は存在するものであって、これを「情報様式」と名付けて、次の3つの段階に区分する。

4. 情報様式の三つの態様

一つは「対面し、声に媒介された交換、次に印刷物によって媒介される書き言葉による交換、そして電子メディアによる交換」の3つである。この考え方は、それぞれの段階の情報様式において、言語が主体に働きかけ、その結果、主体はどのように構成されるかという視座を含んでいる。だとすれば、それぞれにおいて主体はどのように構成されるのか。

この点についてポスターは、先ず第1の「対面し、声に媒介された交換」の段階では、「自己は、対面関係の全体性のなかに埋め込まれることによって、発話地点として構成」される。対面的な全体性の中で、人々は、発話者は誰であるかは誰の目にも明らかな状況のなかで、社会内部に位置づけられ、「こうしたコンテキストにおいて、主体は社会的であり、相関的な自己として構築され、再生産されている」とみなす。

次いで第2の情報様式の段階、印刷物の段階では、「自己は理性的/想像的自律性における中心化された行為者として構成される」。書き言葉と印刷された言葉によって、諸個人は対面的状況における場合と同じように、特定の個人として同一性

を保持することは困難となる。しかし、エクリチュールに付する「署名」によって、「実際の同一性は後から召喚することができる」。そのことによって、人々は自律的主体として構成されるのである。

情報様式の3つ目の段階たる電子的段階においては、「自己は脱中心化され、散乱し、多数化され、常に不安定なまま」に主体は構成される。つまり、「コミュニケーションの主体にとって、対象は言語の中に表象されたものとしての物質世界ではなく、シニフィアンそれ自体の流れとなろうとする。

(第3の)情報様式においては、主体がシニフィアンの流れの「背後」に存在する「現実」を識別しようとすることはますます困難な、あるいは的外れなこととなり、その結果社会生活の一部はメッセージを受け取り、解釈するための諸主体を位置づける活動となるのだ」。

こうして、「主体はもはや絶対的な時間/空間の一点に位置してはおらず、また物理的で固定された視点をもってそこから何をするかを合理的に選択判断したりはしない」。ここにおいて、主体は主体自身の「理性的で自律的な主観性」に中心をもち、定義された自我によって境界づけられていると考えることができない。そうではなく、私は社会空間を横断して崩壊しており、覆され、分散しているのである」。

5. エクリチュールとは何か

では、第3の情報様式において、「『現実』を識別できなくなった」彼らを取り巻くエクリチュールの概念については、記号論的哲学者J. デリダの所論を援用する。

デリダの哲学において、エクリチュールの概念は、パロールの対岸に位置する概念ではない。エクリチュールは話し言葉と対立するものではなく、話し言葉と書き言葉の区別に先立つものなのである。この点については、井筒俊彦の次の説明がわかりやすい。

「話者が口を開いて何か言う。言いながら、彼は自分の言葉を耳に聞き、そのままそれを了解する。この理解は直接無媒介であって、その瞬間、彼のこころ、つまり「意味」は、絶対的直接性において彼の意識に現前している、とフッサールは言う。ロゴスの現前。だが、ここにおいてすら、デリダはロゴスの絶対的現成を否定する。発声と「意味」了解との、ほとんど間髪を入れぬ接合点にも、彼はかすかな遅延を見るからである。こんな微妙な一

瞬にすら、彼は「相異」＝「相移」の介在を見るのだ。現前する（かのごとくに見える）ロゴスは、実は純粹に現前してはいない。発声と了解との間の目にもとまらぬ間隙に、無がしのびこむ。より一般的に、すべての有のなかには、始めから非有が浸透している。非有によって浸透された有は、もはや有ではなくて、有の「痕跡」である。

こうして、フッサール以来、「現前するもの」とされてきたパロールのなかの直接的な「実在的意味」の現前性は、わずかな「遅延」によって、有の「痕跡」と捉えるしかないことを知らされる。すなわち、パロールもまたエクリチュールと同じように、「いつも既に著者と真理の非-同一性に取り付かれており、いつも既にエクリチュールなのだ」というわけだ。

かくて、デリダはエクリチュールの概念を包括的に捉えて、次のように定義する。「表記が文字的であろうとなかろうと、またたとえそれが空間内で配分するものが声の秩序とは無関係な物—映画書法、舞踊書法は勿論、絵画的、音楽的、彫刻的な〈書法〉（エクリチュール）などに至るまで—だとしても、表記というもの一般を惹き起し得るあらゆるものを示すために、〈エクリチュール〉と言われるのである」と。

6. 電子的エクリチュールの特性

デリダのこのエクリチュールの概念は、最も広義の定義とみることができる。この定義を公にした『グラマトロジー』の刊行は1967年であった。当時はコンピュータリゼーションの波もさほどではなかったが、ポスターによれば、「デリダの仕事にとってコンピュータのエクリチュールとは、マイナーだが重要でないわけではないテーマ」であった。しかし、その内容から見れば、マイナーな問題からメジャーな問題になった50年後のネット社会を見越した定義と見なすことができる。

デリダのこのエクリチュールの定義ほど、現代ネット社会における電子的エクリチュールの特質を考えるに最適な定義はない。今やネットの中に「表記されるものの全て」はエクリチュールと見なすべきであり、実際、ネットの中には、「音声言語や文字言語は言うまでもなく、映画書法、舞踊書法は勿論、絵画的、音楽的、彫刻的な〈書法〉」等、ありとあらゆる〈書法〉が入り乱れている。その現状にいささかでも踏み込めば、映画とか舞踊とか、個別のジャンルのみを対象にして、電子的

エクリチュールを語ることはむしろ無意味というべきであり、映画からダンスから音楽から絵画から、そして、画像や動画などに組み込まれた音声言語・文字言語に至るまで、それら全てが融合一体化したエクリチュールの世界がそこに出現しているのである。

今や一旦、ネット社会に入れば、画像あり、動画あり、音楽あり、文字あり、音声あり等々、それらが一つのエクリチュールという形をとってユーザーの前に現れるわけだが、それら全体を電子的エクリチュールと捉えて特徴付ければ、「声としてのエクリチュール」とみることができる。

所謂「電子的エクリチュール」の中には、パロールとエクリチュールが融合したかの如き言語が氾濫し、その種の言語は、過剰に感情性の溢れたことばが甚だ多い。こうした現状を鑑みて、ノーベル賞作家カズオ・イシグロは、「感情優先社会」という形容を与えたが、筆者もまた、「情報社会は情動社会」という主題のもと、「電子文字のエクリチュール」に内在する感情性の横溢についてその問題点を指摘したことがある。

「感情優位社会」ないし「情動社会」のもと、今日、「電子的エクリチュール」は「声としてのエクリチュール」として作用し、個人の合理的判断に資するよりも、感情性の刺激に関連する機会が多々見られる。その方向は、かつての「活字的エクリチュール」が理性的主体を析出してきたメカニズムとは真逆であり、現代の若者は、ポスターの指摘の通り「脱中心化されて方向性を失った」主体として構成されつつあると言っても過言ではない。

7. 主体の変容をめぐって

今や、「電子的エクリチュール」は、合理的判断を下し得る近代的個人の存在を侵食しつつあり、社会の至る所で非合理主義の発生が顕著になって来ている。その背景をめぐって、ポスターに即して言えば、かつての活字的エクリチュールは目的合理的行為を促し、そこでの言語のあり方は、フィニシアンとフィニシエの一体化した言語として作用した。それ故に目的合理的行為の道具として活用することができた。これに対して、電子的エクリチュールの場合は、感情性の溢れた言葉に取り巻かれて、目的的行為よりは感情的行為の誘発を促し、そこでの言語はフィニシアンとフィニシエの分離した単なる記号として作用し、言語の指

示性は失われているために現実の方向性を確認することが難しい状況に変容してきたのである、と。

こうした傾向に関しては、近年、我が国でも様々な言説が現れてきており、例えば、橋元正明による「スマホ・ネット利用のもたらすもの」に関する実態調査によれば、先ず第一に記憶の外注化が顕著になる、第二に関心領域の狭小化、第三に特殊少数意見の優勢化、第四に同質的意見空間の形成等々、スマホ・ネット利用者の特徴的な傾向を明らかにしている。さらに、大澤真幸は、最近の著書の中で、現代の多くの人々は「半径三メートル以内の親密圏に関してしか、真に納得のいく理解ができないと感じそのような内輪にとどまっていたという欲求を持っている」と述べ、その背景をネット社会の漫画やアニメや映画や小説などの、所謂、我々の言う「電子的エクリチュール」の問題性に関連している。これらに加えて、コンピュータのリテラシーが「文字によってものを考える精神」に決定的なダメージを与えており、デジタル教育に警鐘を鳴らすのは佐藤卓己である。「文字によってものを考える精神」の衰弱、これもまた、我々の言う「電子的エクリチュール」すなわち「声によるエクリチュール」に対する濃厚な接触の結果であると考えられることができる。

ここに引いた幾つかの論者の研究動向をフォローしてみれば、標題に挙げた「エクリチュールの変容」がもたらす「知の変容」という問題は、現代のネット社会において急速に進みつつあり、その実証的な検証が迫られるところである。

8. メディア利用にみる「奇妙な構造」

そこで、上述の問題に関連するデータに目を配れば、まことに興味深い調査結果をみることができる。総務省『情報通信に関する調査』によれば、令和2年度において、全体のネット利用時間(168.4分)はテレビ視聴時間(163.2分)を初めて凌駕したが、令和3年度のネット利用時間(休日)に注目すると、20代が303.1分で最も多く、60代の92.7分が最も少ない。その代わりにテレビは60代326.1分と、20代のネット利用時間よりも多い。テレビとネットの利用時間において、20代と60代の世代は真逆の結果を示している。

次いで「重要なメディアは何か」については、20代はネットの重要度(86.0%)が高く、60代ではテレビ(92.4%)の方が高い。20代60代共に、普段よく利用しているメディアの方が「重要度が高

い」。利用時間と重要度についてはそこに一貫的な意味を認めることができる。

ところが、「信頼しているメディアは何か」についてその結果をみると、20代はテレビに対する信頼度が一番高く46.0%、ネットに対する信頼度は25.6%とかなり低い。これに対し60代の場合、テレビ信頼度92.4%、ネット信頼度56.5%とテレビ信頼度は群を抜いて高い。

この結果だけを見ても、20代若者のメディア利用の実態に「奇妙な構造」が潜んでいることがわかる。すなわち、20代の若者の場合、端的に言えば、「信頼していないメディアの利用度が一番高い」、他方、60代では「信頼しているメディアの利用度が一番高い」結果を示しているのである。

通常、メディアを利用する場合に、信頼しているからこそ多くの時間を割いてそのメディアを利用するというのであれば、そこに意味の一貫性を認めることが可能である。しかし、現代の20代の若者のネット利用実態は、信頼していないメディアであるにも関わらず多くの利用時間を割くという「奇妙な構造」が潜在しているのである。

かつてポスターが指摘した電子的エクリチュールに取り巻かれた「脱中心化した自己」の姿は、50年後の今になって現実の問題となってきたかの如くである。そしてまた、信頼してもいないメディアに対し、長時間に渡ってこれを利用するという倒錯した「構造」はおそらくメディア史上、初めて現れた現象であろう。

参考文献(頁数の表示は省略)

- [1] J. ハバーマス『公共性の構造転換』細谷貞雄訳、未来社、1973。
- [2] M. ポスター『情報様式論』室井尚・吉岡洋訳、岩波現代新書、2001。
- [3] J. デリダ『根源のかたに グラマトロジー上』足立和浩訳、現代思潮新社、1972。
- [4] 井筒俊彦『意味の深みへ』岩波書店、1985。
- [5] カズオ・イシグロ『クララとお日さま』土屋政雄訳、早川書房、2021。
- [6] 橋元正明「便利な端末が私たちにしていること」『世界』岩波書店、2021年7月号。
- [7] 大澤真幸『サブカルルの想像力は資本主義を超えるか』角川書店、2018。
- [8] 佐藤卓己『現代メディア史新版』岩波書店、2018。
- [9] 総務省『情報通信白書』2021、総務省。

付記

本稿は、令和4年度共同研究プロジェクト（炭谷晃男代表「『エクリチュールの変容』と『知の変容』に関する研究」）の成果を前納弘武の文責において纏めたものである。